

# ノーモア・ヒバクシャ通信 第35号

発行 2017年6月30日

ホームページ <http://www.kiokuisan.jp/>  
継承ブログ <http://keishoblog.com/>  
フェイスブック <https://www.facebook.com/kiokuisan>  
ツイッター <https://twitter.com/nomorehibakusha>

発行者  
NPO法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会  
〒102-0085  
東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F  
Tel/Fax 03-5216-7757 (直通)  
Email [hironaga8689@gmail.com](mailto:hironaga8689@gmail.com)  
郵便振替口座 00110-5-292881  
口座名義 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

## ★もくじ

I. 第5回通常総会ならびに第1回理事会のご報告	P 1
《第5回通常総会関連資料》「ご挨拶」(岩佐幹三代表理事)	P 3
《2017年度選任役員名簿一覧》	P 5
II. 「未来につなぐ被爆の記憶」プロジェクト～5/27記者発表～	P 6
III. 部会、作業グループの取り組みから	
1. 資料庫部会	
コープみらいネットワーク推進会議の参加者が資料庫見学	P 8
ご寄贈ありがとうございました(和歌山、愛知から手記集や運動資料他)	P 8
IV. 各地の取り組み、関連企画から	
1. 【つなぐPJ】のレポート	
(1) 映画『アトムとピース』 松永 瑠衣子さんに聞く	P 9
(2) 長崎でつなぐ被爆体験 三根礼華さんに聞く	P 12
V. 出版物の紹介	
日本被団協結成60周年事業「沖縄交流ツアー」報告集	P 14

## I. 第5回通常総会ならびに第1回理事会のご報告



去る5月27日(土)午後1時～4時、東京四谷の主婦会館プラザエフで第5回通常総会が開催されました。岩佐幹三代表理事より冒頭の挨拶で、「核兵器禁止条約」草案の発表など国連での画期的な動向、また会結成に尽力された故肥田舜太郎さん、故池田眞規弁護士のご功績などにも触れながら、改めてこの会のはたすべき役割を強調されました。

(詳細は、後掲「第5回通常総会 ご挨拶」をご参照ください。)

総会の概要は次の通りです。

①会の運営に顕著にご支援いただいた次の組織の方々へ感謝状を贈呈しました。

生活協同組合コープみらい	理事長 新井ちとせ 様
富士ゼロックス首都圏株式会社	執行役員 片山真 様
株式会社P F U	執行役員常務 宮田和久 様
情報産業労働組合連合会	中央執行委員長 野田三七生 様

②第1号議案2016年度事業報告（案）承認の件、第2号議案2016年度決算（案）承認の件（監事監査報告を含む）、第3号議案役員選任の件が賛成多数で承認されました。主な発言は次の通りです。

- ・5年間で資料も集まり、それらをデジタル化して公開する体制が整ってきた。「未来につなぐ被爆の記憶」プロジェクトを通じて会の活動を広く知ってもらおう。
- ・会の活動が見えない。アーカイブもよいが、先ずは現物を見せることだ。継承センター建設のための資金集めが一向に始まらない。
- ・インターネットは自分ではほとんどできない。どうすれば被爆者一人ひとりに分かってもらえるかを考えたい。

そのほか、被爆70年「被爆者として言い残したいこと」調査、ベルファルトの国際平和博物館会議、「継承活動に取り組む人々をつなぐ」プロジェクトについて、発言がありました。

③2017年度事業計画及び予算について、討議が深められました。主な発言は次の通りです。

- ・小規模でも収集した資料の展示など、会の活動を伝えていきたい。
- ・継承センター設立のための募金をどのように進めていくのかが見えない。会員拡大と寄付金募集の具体的なプランを持っているのか。
- ・「被爆者運動に学び合う学習懇談会」の資料は貴重だ、継承する会のHPで共有できないか。
- ・被爆者や遺族のところに眠っている資料や遺品があると思うが、どう考えているか。（遺品については、施設の条件や保存環境など専門家の協力が不可欠だ。）

④第1回理事会が開催され、代表理事に岩佐幹三氏、副代表理事に安齋育郎氏、中澤正夫氏が再任されました。新任理事並びに退任理事のご挨拶がありました。

なお、役員名簿一覧は後掲資料をご参照ください。

## 《第5回通常総会関連資料》

《NPO法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会 第5回通常総会》  
ご挨拶

代表理事 岩佐 幹三

本日は多数の会員の皆さんがご列席いただきありがとうございます。

多くの皆さんのご支援を得てゼロから発足して5年、会としての基盤の整備も順調に進めてきた今日ですが、最初に残念なことを申し上げなければなりません。

本会の結成に大きな役割を果たして下さったお二人の先覚者が、昨年から今年初頭にかけて相次いでお亡くなりになりました。皆さんにはご承知のことと思いますが、「被爆者は人類の宝だ」と言って励まし続けてこられ本会の発案者でもあった池田眞規弁護士さんと、ご自身被爆者であるだけでなく被爆者医療・内部被ばく問題に献身的に貢献され、本会結成の呼びかけ発起人の一人となり賛同者の拡大に尽くして下さった肥田舜太郎先生です。お二方ともに肺炎が悪化してのことと承っていますが、高齢化した私たちにとっても用心しろよとの教訓を残して逝かれたように思います。惜しんでも惜しみきれないことです。今はお二方のご遺志、ご遺訓を受け継いで今後の活動に活かしていくことです。心からのご冥福を皆さんと共に祈りたいと思います。

翻ってこの間に本会の活動に深いご理解をいただき、会の運営に特に大きくご支援をいただいた組織についてご報告したいと思います。私たちが、初期の基礎的な目標としてきた原爆被爆者の被爆体験や被爆者運動などの基本的な資料の整理・保存のための条件づくりに少なからぬお力添えを下さったのが、首都圏を拠点とされているコープみらいです。南浦和の施設に資料を保管、会議室の使用をご了承いただき、資料整理が大きく促進されることになりました。また富士ゼロックス並びに株式会社PFUにおかれましては、文書電子化の飛躍的な促進のために同社のスキャン機器類を贈与くださいましたので、ありがたく活用させていただいております。情報労連からは「愛の基金」として多額の寄付金をいただきました。

つきましては本日の総会を機に、各組織のご理解とご支援に対して感謝の印というには真にささやかではありますが、感謝状を贈呈して、心からお礼を申し上げるとともに、今後とものご支援、ご鞭撻をお願いすることにいたしました。

私たちは、このようなご支援にもつつまれて発足5年、会の活動の基盤整備に力を注いできました。これを陸上競技の三段跳びにたとえれば、私たちは今ホップ・ステップ・ジャンプの助走からホップに移ろうとしている段階だと思えます。「継承センター」の構想も固まり、資料のアーカイブス構築へようやく踏み出した今日、本会の基本目標である「記憶遺産の継承」をいかなる形で形成・拡大し、組織化していくか、その責任の重大さにますます身も引き締まる思いです。

ところで皆さんもご承知と思いますが、本日の総会を前にして、私たちにとって歓迎すべき国際情報が伝えられてきました。「核兵器のない世界」への展望を切り開く第1歩ともいえる情報です。

つい先日の5月22日のことです。国連で行われている核兵器を禁止し廃絶をめざす条約交渉会議のホワイト議長が、国連欧州本部で核兵器禁止条約の草案を発表されました。

速報によれば、条約の前文では「核兵器の被害者 (hibakusha)、核実験の被害者の苦しみを念頭に置き…核兵器の使用は人道法の原則および規則に反すると宣言」し、「核兵器廃絶を誠実に追求する」ことが表明されているようです。それと同時に核兵器保有国も参加しやすいよう条件も緩めたものになっているようです。核戦争の最初で唯一の被害者である広島・長崎の被爆者が訴え求めつづけてきた核兵器廃絶の要求が、国際的な文書として国連に提起されることになったのは画期的なことです。

あの日から72年、被爆の結果、身内・家族、友人、知人などを失い、その人々の死は無駄な死として歴史に活かされることもなく、生き残った人々もいつまでも被爆者という癒されることのない運命を背負わされ続けてきました。その苦しみの体験から被爆者は、調査や手記・体験記、実相普及の活動をつうじて核兵器は反人間的な、二度とくり返してはならない絶対悪の兵器だということを、世界中に訴えつづけてきました。

今日ここまで来られたのは、被爆者とのその要求を自分の問題と受け止めて、共に考え、共に歩み続けてくれた世界中の平和を愛する諸国民の世論の力によるものです。

そして、2010年の国連NPT(核兵器不拡散条約)再検討会議の前後から非核兵器保有国の間で広まり始めた核兵器被害の非人道性の問題を追及しようとする世論の広まりが、今や国連の場で「核兵器を禁止し、廃絶」をめざした国際的な協定、条約をつくろうという動きとなって、国連加盟国の多数を占める非核兵器保有国を中心に大きな流れをつくりだすことになったのだと言えます。

しかしこれで被爆者をはじめ平和な世界を求める私たちの願いが達成されると早合点しないでください。条約や国際協定が結ばれても、そのことによって核兵器が直ちになくなるわけではありません。

それどころか核保有国はすでに巻き返し工作を始めていると見た方が賢明でしょう。彼らが頼りにしている核抑止論(核兵器を持っていることによって外敵の侵略を防げるという理論)ですが、よく考えてみると他国に「俺たちは核兵器を持っているぞ」と威嚇しているに等しい理論・行為に他なりません。

では断念しなければならぬのでしょうか。いやそんなことはありません。長年かけて進めてきたのは、私たち市民の力、世論の力です。今日本被団協が呼びかけて進めている「国際署名」を「自分には関係ないよ」と言っている無関心層にどこまで理解され浸透していけるかだと思います。私は、町内会の総会で了承を得られたのでできるだけわかりやすい文章をつくって挑戦してみるつもりです。工夫と想像力で、草の根の力を引き出すこと、本会のこれからの活動と似ているように思っています。

継承する会には、被爆者とその運動が残してきた資料が蓄積されてきています。それら

を多くの人々に活用できるものとする事は、核兵器廃絶への確かな根拠を提供し、国内外の世論を広げる土台ともなるものです。

私たちが、無関心な人、無関心を装っている人にどこまで理解され、ひきつけられるようなものを発信し、提供できるか工夫し、構想して行こうではありませんか。

《2017年度選任役員名簿一覧》（敬称略）

【理事】

代表理事	岩佐幹三（日本被団協顧問）
副代表理事	安齋育郎（立命館大学名誉教授）
	中澤正夫（医師）
理事	有原誠治（映画監督）
理事	大岩孝平（東友会会長）
理事	大久保賢（弁護士）
理事	岡山史興（会社経営）
理事	聞間 元（医師）
理事	内藤雅義（弁護士）
理事	直野章子（広島市立大学教授）
理事	中川重徳（弁護士）
理事	二村睦子（日本生協連組織推進本部長、新任）
理事	舟橋喜恵（広島大学名誉教授）
理事	八木良広（愛媛大学教育学部特定研究員、新任）
理事	安田和也（第五福竜丸平和協会事務局長）
理事	山根和代（平和のための博物館国際ネットワーク 執行理事）
理事	吉田みちお（東京被爆二世の会 事務局長、新任）
理事	伊藤和久（会事務局長）

【監事】

監事	木村 誠（司法書士）
監事	田部知江子（弁護士）

なお、次の方々も退任されました。この間、会の発展のためにご尽力いただきありがとうございました。心より感謝申し上げます。

笹川博子さん	（日本生協連 執行役員）
橋本左内さん	（牧師）
吉田一人さん	（ジャーナリスト、杉並区被爆者の会理事）

## II. 「未来につなぐ被爆の記憶」プロジェクト～5/27記者発表～

5/27（土）第5回通常総会の開会を前に「未来につなぐ被爆の記憶」プロジェクトの記者発表を行いました。



記者発表には、継承する会の岩佐代表理事、伊藤事務局長、このプロジェクトを担当する岡山理事、プロジェクトメンバーの首都大学東京の渡邊英徳先生（システム構築）、同大学院生の秦さん、富士ゼロックス首都圏株式会社の片山真氏（機材提供）、日本生協連の二村睦子氏（PJ事務局・活動プログラム制作）、コープみらい副理事長の小林新治氏（資料保管などへの協力）が参加しました。

このプロジェクトを通じて、被爆者から次の世代にバトンがつながり、さらにその先の世代に、そして世界に広がっていけばと思います。

### 《記者発表の概略》

Q：今現在、どのくらいの資料が集まっているのか。

A：被団協の運動に関する資料（不定形）は目録上で4,800点、書籍・冊子類は数千点になると思う。継承する会が集めた資料の特徴として、全国各地の被爆者の会が独自に発行した手記、証言集が400点くらいある。

「未来につなぐ被爆の記憶」プロジェクトは、これらの資料の中から体験記、手記類に絞って電子データ化、アーカイブ化を進めていく。その過程で地域の生協の方々をはじめ、多くの方々に参加いただき、全国各地でその地域に住んでいる被爆者の方と一緒にワークショップを開くなどして、電子データ化、アーカイブ化する過程そのものが継承の場になるように構想している。

Q：一般公開はいつごろになるのか。

A：今年の秋ぐらいまでかけてシステムの構築や、首都圏中心になると思うがワークショップを実際に開催するといったトライアルを進めていく。その上で、本格的スケジュールを組んでプロジェクトを進めていく流れになる。

一般の方に見ていただく前に、登録作業をする方だけが見られるようなものが先行する。ヒロシマ・アーカイブは相当吟味して最終的なデザインをつくった。今回も集まった資料に応じて、人々にどのように伝わるかということを検証しながらデザインをしていくことになる。

Q：ワークショップのイメージは。

A：二通りあり得ると思っている。被爆者の方をお招きして一緒にデータの登録作業をするというワークショップで、被爆者の方に当時どこにいらしたか、あるいはその日の足跡を地図上でたどっていただきながらお話をさせていただく。それを若者が聞きながらデータにプロットしていく。ただ、全ての場所でそれが可能というわけではない。被爆者の方をお招きできないときは、最初に証言を熟読して内容を理解しつつデータを載せていくという形式も取れると思いますし、証言のビデオがあるならば、それを見て登録作業をするということもできる。

このプロセスを広島、長崎以外の地域でもやるということに大きな意味がある。今は、「原爆」、「被爆者」というテーマが広島、長崎だけのテーマになっていないか。全国各地に被爆者の方がおられて、そこで生活をおくってこられたが、身近な存在ではないと感じられ、興味の対象ですらなかった。被爆者の方々の存在がワークショップでのリアルなコミュニケーションを通じて、実は身近な存在で自分たちにも関係があって、しかも自分たちにも伝えていくことができるのだということを、参加していただく方に受けとめていただければという思いがある。

仮のイメージだが、インターネット上に、今はやりの言葉でクラウドですが、そこに色々な資料をフォルダーにわけて格納できる。これはパスワードを知っていればだれでもアクセス出来て内容を閲覧できるので、ユーザーさんにこれを開いていただいて、出てきた資料を入力フォームに入力していただいて、送信していただくと地図の上に掲載される。だからどこからでも参加できるシステムを考えている。

Q：来年以降、どのように取り組みを進めていくのか。

A：今年はプレ期としてトライアルで取り組みをすすめ本格的な取り組みの準備を進めていくが、将来的には47都道府県で必ずいくつかは資料が載っているという形にしたい。そのためにワークショップを一緒にやって登録をしてくれる、そういう活動やグループをつくりたい。2018年から20年までの2年間を全国に呼びかけてそういうグループをつくって活動していく。取り組んでみないとどのくらい登録ができるのか、どのくらいのスピードで出来るかわからない。いったん2020年までを区切りとして取り組んで、それで全国のどのくらいをカバーできるか、その上で19年にその後の取り組みについては判断をしたい。2年ないし4年をかけて全国をカバーする登録ができればと思っている。

Q：先ほどボランティアで作業を進めていくとのことだったが、ボランティアはどのようなイメージなのか。

A：ボランティアの募集は今日の記者発表や会のSNSなどで情報を提供し呼びかけていく。

### Ⅲ. 部会、作業グループの取り組みから

#### 1. 資料庫部会

##### ■ コープみらいネットワーク推進会議の参加者が資料庫見学

資料庫部会での出版物の整理作業は、一昨年(2019)の7月以降、コープみらいから南浦和のコーププラザ浦和4階の一室を資料庫および資料整理作業の場として利用させていただくことにより、飛躍的に進展してきました。今年3月には、富士ゼロックス首都圏、(株)PFUの二社から資料の電子化(PDF化)のためにご寄贈いただいたスキヤニング機器(それぞれ2台)が搬入され、まずは全国の被爆者の会が発行してきた手記・体験記類から電子化の作業が始まっています。

6月23日(金)、コープみらい埼玉エリア各ブロック正副委員長と県本部職員の方々51名が参加してネットワーク推進会議がコーププラザ浦和で開かれ、そのなかで継承する会の「未来につなぐ被爆の記憶」プロジェクトのミニ学習会を開いてくださいました。岡山理事が動画でプレゼンテーションをした後で、参加されたみなさんが4階にお借りしている資料庫を見学に来てくださいました。

いま、国連で実を結ぼうとしている核兵器禁止条約につながる長い時間をかけた被爆者運動の諸資料(国際活動、国会への要請行動、各種調査など)や、ジャンル別に分類し8連の書架いっぱい収められた原爆関連出版物、まず電子化をすすめている全国各地の被爆者の会が発行してきた証言集等を紹介し、さらに寄贈された最新の機器によるスキヤニング作業など、今後の電子化作業の一端を見ていただくことができました。

##### ■ ご寄贈ありがとうございました

#### 1) 和歌山、愛知から手記集や運動資料

解散した和歌山県原爆被害者の会(和友会)の会長だった楠本熊一さんから、5月17日、段ボール9箱の資料を贈呈いただきました。会が発行した『語り継がねばならないこと』第一集(1972)をはじめ各地の被爆者の会の手記集などの冊子類が7箱分と、不定形の運動資料が2箱になります。

また愛知県原水爆被災者の会(愛友会)からは、6月19日、第二次分として6箱の県内運動資料が愛宕事務所に届きました。これら運動資料は、前回送付の資料(県内行脚、1977NGOシンポ一般調査票、事務局日誌など)と合わせ、昭和女子大の学生さんらによる夏休みを利用した作業で整理する予定です。

#### 2) その他

○ 石川県原爆被災者友の会・西本多美子さんより DVD『この空を見上げて～石川・被爆者たちの証言～』

被爆70年、同会が国の慰霊事業として国と石川県の助成をえて制作。1. 子どもたちが見たヒロシマ・ナガサキ(4人の証言、31分43秒)、2. 兵隊さんが見たヒロシマ(2



人の証言、18分52秒)、3. 西藤少年が見た原爆～原爆とは何か～(16分2秒)、4. 朗読『タミちゃんの8月6日』(西本さんの実話をもとにした物語、2人のアナウンサーが朗読、15分21秒)の4部からなり、時間や目的により様々な活用が可能です。それぞれの語りと表情からは、70年を経ても消し去ることのできない原爆による心の傷がうかがわれます。頒価：1000円(送料別)、申し込みは石川友の会へ(TEL 076-298-2487)。

○ 関千枝子さんより 関千枝子・中山士朗著『ヒロシマ往復書簡 第三集 2014-2016』  
関さん(被爆時13歳、ジャーナリスト)と中山さん(同15歳、作家)による往復書簡の3集目。同じ広島で被爆した二人の手紙のやりとりのテーマは、「花」に始まり「生」と「死」をめぐる、文学と証言、関さんの著書と朗読劇、オバマ演説…と実に多岐にわたりますが、そこからは、次々に人や事象の連なりが見えてきます。それは時空を超えて死者と生者をつなぎ、精いっぱい生き、ヒロシマを伝えようとしてきた人たちを浮かびあがらせます。伏流水が川に合流し、やがて海に注がれるように、70年余の歳月を経た二人のことばには、全編をつうじて次代に伝わることへの願いが込められています。(西田書店、定価：1600円+税)

#### IV. 各地の取り組み、関連企画から

##### 1. 【つなぐPJ】のレポート

###### (1) 映画『アトムとピース』 松永 瑠衣子さんに聞く



私が彼女のことを知ったのは、昨年公開された映画『アトムとピース』がきっかけだった。この作品は、長崎出身・被爆三世の松永さんが、長崎から福島・青森と“核の平和利用”の現場を旅し、核にまつわる“なぜ?”に向き合っていく姿を追ったものだ。

映画を見た後、私はすぐに「松永さんと会ってみたい」と思った。「長崎出身」「被爆三世」「同い年」と自身とも共通点が多かった彼女が、映画での様々な出会いを通じ、どのようなことを感じたのか、直接聞いてみたい。そして、これまでも被爆者の方々や東日本大震災の被災者の方々と交流のあった彼女と、考えや想いを交わしてみたいと思ったのだ。そして、今年1月、お話を聞く場を持つことができた。

###### ■ 映画『アトムとピース』出演のきっかけは？

大学生の時に、沖縄戦を語り継ぐ活動をしている同い年の女の子と出会いました。彼女が講演で全国をまわっている姿に刺激を受け、「いつか2人で何かできないかな」と話をしていました。社会人1年目、彼女から「瑠衣子、映画に出てみない？」という電話がかかってきたんです。話を聞くと、彼女が沖縄で活動をしている時に、(映画の)監督の新田さんと知り合い、「被爆三世の女性を探している」という相談を受けたそうで。監督のイメージ(被爆三世でもあり、東日本大震災・原発に関する活動も行っている。その一方で観ている人と近い目線で核を学んでいけるようなベースがある。)と私がぴたりと合っていたということで、映画出演のお話を頂きました。

“小学校の講師”という立場の自分が映画に出ることを、監督は「意義があることじゃないか」と言ってくださって。「私じゃ務まらないのでは」と相談もしたが、監督が出演を強く希望してくれたので、お受けすることになりました。

#### ■ 映画撮影の中で印象に残っていることを1つあげるなら？

青森で訪れた「あさこはうす」と小笠原厚子さんの姿。この場所を訪れ、厚子さんに出会ったことは衝撃でもあったし、心を大きく動かされた出来事でした。大間原発の用地買収を拒否し「どんなことがあっても(この土地は)譲らねえ」と言った、厚子さんの母・あさ子さん<sup>\*1</sup>の言葉が強く印象に残りました。あさ子さんは買収の話を持ってきた人に対し「おめえたちも大変だな。この仕事をやっているということは、おめえたちにも守りたい家族があるから、働くしかないから、こうやっておらたちの所に来てるんだよな。でも、おらにだって守りたい家族がいて、守りたい土地があるんだ」と言われていたそうです。相手のことを分かった上で、それでも未来の大間のために譲らず活動を続けてこられた。お二人に「守りたいもののために、自分にできることを、自分にできる方法でやることに大きな意味がある」ということを再確認させてもらいました。

「あさこはうす」を訪れたことで、戦後、日本で原子力研究に携わった人々の背景についても考えるようになりました。もしかしたら彼らは、何もなくなってしまった日本に希望をもたらすため、その一心で原発の開発を進めたのかもしれない。「否定からは何も生まれない」とあさ子さんから学びました。自分と意見の異なる人の背景も理解した上で、これから私たちはどういうエネルギーを選択していくのか考えることが大切だと思います。

#### ■ 映画出演後、新たに取り組まれたことなどは？

長崎の友人が行っている「What's Your Peace? <sup>\*2</sup>」という取り組みで、熊本県・佐賀県・沖縄県・広島県をまわりました。平和教育が盛んな長崎県を一步出てみて、他の地域ではどんな教育をやっているのか、平和についてどんなことを思っているのか聞いてみたかったからです。「平和な時とは」、「平和じゃない時とは」などのテーマに沿って、グ

ループで意見を交わす場を設けました。県によって出てくる意見は全然違いましたが、印象に残っているのは沖縄県。沖縄戦のことはもちろん、米軍基地のことが挙がりました。この回をきっかけに、辺野古基地を訪れたり、デモを行っている人に話を聞いたりしましたが、基地に関しては様々な意見がありました。同じ日本に住んでいても、同じ「平和」の形を抱いているわけではないと実感しました。

## ■ 同世代へ向けて

今でこそ「否定からは何も生まれない」と思うようになった私ですが、これまでは何でも否定から入る人間でした。例えば、選挙に行かない人に対して「なんで選挙に行かないのか」と強い言葉で訴えるようなこともしていました。でも、それじゃ何も生まれないし、相手を嫌な気持ちにさせることにやっと気付いた。皆が皆考えるというのは無理だと思うので、自分の人生の中でどれだけ時間がかかってもいいから、とにかく自分が伝え続けていくことだけは止めてはいけないと思います。それは難しいことではなくて、笑い、楽しみながらでもやっていけることです。以前、キャンプをしながら、今の社会問題のことなど、ちょっとだけ真面目な話をするような場を設けたことがありました。笑いを交えながらそういう話をしてみると、参加者は意外に関心を持ってくれました。こういう場がきっかけになるのかもしれない。

## ■最後に

私たち1人1人にできることは、自分の目の前にいる人の意識を少しでも変えること、平和の種を植えることだと思います。それが今の自分にできることじゃないかなと。何年、何十年、何百年かかるか分からないけれど、1人1人の努力が10人に伝わって、100人に伝わっていく。地道だけどそれをやり続けるしかないのかなと思います。

1つ1つの質問に対し、丁寧に答えてくれた松永さん。彼女の活動への真摯な向き合い方、想いに触れ、はっとさせられるような気付きが随所にあった。彼女が繰り返し話していたことだが、はなから相手を否定してしまうのではなく、多様な考え方を受け入れていくこと。そして地道でも続けていくことが、継承活動には大事なのだと思う。成果を出したい気持ちが先走ると、つい忘れてしまいがちなことだからこそ、心に留めておきたい。

※1：大間原発の用地買収を拒否し、自身の土地に「あさこはうす」を建設。反対運動を続けた。2007年、逝去。

※2：「What's Your Peace?」facebook ページ  
(<https://www.facebook.com/whatisyourpeace/>)

中尾（継承活動に取り組む人々をつなぐPJ）

## (2) 長崎でつなぐ被爆体験 三根礼華さんに聞く

今回は長崎で被爆体験の継承活動を行っている三根礼華さん取材した。長崎出身・在住の三根さんは、現在 29 歳。ご家族に被爆者をもつ被爆三世だ。観光客などに原爆資料館や被爆遺構を案内する平和案内人<sup>\*1</sup>として、また、23 歳の時に被爆した自身のおばあさまの体験を引き継ぐ家族証言者<sup>\*2</sup>として活動されている。血のつながりはあるものの、“非被爆者”である彼女が活動を始めたきっかけはなんだったのだろうか。そして活動する中で気づきや思いについて話を伺った。

### ■ 活動を始めたきっかけは？

大学 2 年生（2007 年）の時、電車の中吊り広告で平和案内人第 3 期生の募集を知り、応募したことがきっかけです。平和活動などに関心があったというよりは、長崎が好きで、長崎に関われる、かつ大学生で時間がある時に（ガイドの）資格が取れることに惹かれ、応募を決めました。その後、案内人として活動を続けている時に、長崎市が新たに家族証言者の募集を始めることを知りました。自分の祖母の被爆体験を引き継いでいければと思い、26 歳の時、証言者としての活動も始めました。

### ■ 家族証言者の聞き取りや講話作成の過程について

“対被爆者”というよりも“対おばあちゃん”として話を聞いていました。祖母がどれだけ本心話をしてくれたか分かりませんが、被爆体験というよりも「昔あったこと」として話してくれていたように感じます。同じことを何度も繰り返し聞いて、理解を深めました。

講話については、内容の組み立て方、表現方法の工夫を重ねる中で、祖母が自身の体験を話している様子を映した動画を使用しました。実際の姿や声を届けることも大切だと思ったからです。また実践はしていませんが、自分が読んでみて「（被爆の実相や被爆者の思いが）伝わるのではないか」と考え、被爆者の手記なども取り入れています。

### ■ 家族証言者を始めたことへの、おばあさまの反応は？

特別に何か言われた、ということはありませんでした。以前から、私がこうした活動を行っていることは知っていたので、自然に受け止めてくれているのかもしれませんが。ただ、祖母が別の取材を受けた時に、「（継承者として）平和を守ってほしいですね。」と述べており、その言葉は印象に残っています。

### ■ 活動への思いについて

被爆者の話や資料などを通して、悲惨さを知ってほしいという想いがあります。そして知って終わりではなく、自分たちに置き換えてみるなど、次につなげてほしいですし、その手助けを担っていただければと思います。

#### ■ これからの展望は？

自分の活動に関わらず、被爆者の方とお話をする機会はたくさん持っていきたいと思います。祖母の被爆体験をより深くまで引き継げるようになったら、交流証言者<sup>※3</sup>としても活動できればと。個人的に関わりのある被爆者の方もいらっしゃるの、そういった方々の想いも繋いでいきたいと思っています。

三根さんのインタビューの中で、私が特に印象に残っているのが

「“(被爆体験を) 話さなかった”ということを含めて、継承していかなければならないと思います。」

という言葉だ。被爆者の方の中には、経験したことのあまりの壮絶さから、自身の体験を一切話さない人も多い。また継承活動に尽力されている方でも、内容によっては口を閉ざされる方もいる。私にも被爆者の祖母がいるが、祖母の口から体験を聞いたことは一度もない。「話そうとしないのだから、こちらからは聞きづらいな…」とも思っていた。今回、三根さんの言葉を聞いて、継承は「体験を継ぐ」ことが全てではなく、その方の「姿を継ぐ」ことなのではないかと思った。“話さなかった”その姿を見ている、知っている、そしてその姿を伝えることも、“人(被爆者)から人(非被爆者)”だからこそできる継承の形なのだということに気付かされた。

継承の形は1つじゃない。だからこそ、様々な人とのつながりの中で、様々な可能性に気付き、輪を広げていきたいと、改めて思えた取材だった。

※1：平和案内人 (<https://www.peace-wing-n.or.jp/guide.html>)

※2：家族証言者 (<http://nagasakipeace.jp/japanese/peace/keisyo/bosyu.html>)

平成28年度からは「託したいかた」と「受け継ぐかた(交流証言者)」を新たに募集開始し、随時募集を行っている。上記HP参照

中尾(継承活動に取り組む人々をつなぐPJ)

## V. 出版物の紹介

### ■ 日本被団協結成 60 周年事業「沖縄交流ツアー」報告集

#### 『命どう宝＝ノーモア・ヒバクシャ 沖縄とむすび「受忍」政策を問う』

昨年、結成から 60 周年を迎えた日本原水爆被害者協議会（日本被団協）は、その記念事業の一環として 12 月に「沖縄交流ツアー」を実施しました。「原爆被害者の基本要件」策定 30 年（2014）、被爆 70 年のつどい（2015）につづく、戦争被害「受忍」政策をのりこえるために他の戦争被害者との連帯を追求するとりくみとして、唯一の地上戦が行われ今も戦争と平和をめぐる最前線でたたかっている沖縄を訪問し、沖縄戦の被害者や沖縄在住の被爆者と交流しながら学ぼうと企画したツアー。その報告集が発行されました。

ツアーでの学びと感動を一人でも多く共有していただけるよう、メイン企画の「ヒロシマ・ナガサキ、沖縄戦をめぐるシンポジウム」の概要を中心に編集され、沖縄在住の被爆者との交流やツアーに参加してはじめて被団協の運動にふれた人たちも含む参加者の感想文も収録。すべての戦争被害者が連帯するたたかいへ「被団協は一步を踏み出した」（岩佐氏）と言われる沖縄ツアーの報告集をぜひ普及・活用してください。頒価：1000 円（税込、送料別）。申し込みは日本被団協へ（TEL 03-3438-1897/FAX 03-3431-2113）。